

【研究主題】図書室運営における事務職員の参画

【副題】 図書室の環境整備と PTA 図書ボランティアとの協働による読書活動推進と教育支援体制の構築

【学校・団体名】 滋賀県 大津市立 瀬田中学校

【役職名・氏名】 臨時事務主事 明智 美佳

1. はじめに

文部科学省は令和 4 年度から 8 年度までを対象とした第 6 次「学校図書館図書整備等 5 か年計画」を策定し、全国的に学校図書館の充実を図っている。大津市でも令和 4 年度より「大津市子ども読書活動推進計画（第四次）」を策定し、子どもの読書活動の推進に取り組んでおり、こうした背景のもと、学校図書室の環境を整備する意義が高まっている。

事務職員が図書室の整備に関わることで、教職員の業務負担を軽減し、教員だけでは手が回らない部分を補完する役割を担う事で、図書室の機能向上を図り、生徒が図書室をより利用しやすくなり、読書意欲の向上が期待できる。

さらに、事務職員が教育現場に積極的に関わることで、学校全体の連携が深まり、教職員と事務職員が一体となったチーム体制が構築できる。今回の取り組みでは、事務職員が図書室の環境整備と PTA ボランティアの立ち上げに関与し、地域と連携した読書推進活動を展開した記録をまとめた。

2. 現状

本校は 2025 年度の生徒数が 896 名（2024 年度 950 名）と、生徒数の多い大規模校である。図書室は、2020 年以降のコロナ禍と生徒数の増加の影響により、学年ごとに週 1 回の開室という制限が続いている。また 2024 年度の図書の年間貸出冊数は 1,427 冊であった。図書購入に充てられる予算は年間約 100～130 万円前後と比較的潤沢で、毎年およそ 1,000～1,300 冊の新刊を購入している。しかし、司書教諭にとって授業、担任業務、部活動の顧問など多忙な日常業務に加え、図書管理業務をすべて担うのは非常に困難な状況であった。

そこで、令和元年度から学校事務職員が図書室の管理に参画し、司書教諭と連携して図書の購入、配架、廃棄、レイアウトの整備などを担当している。新刊の選書を行った際には、他校から依頼を受けて選書データを提供することもある。

3. 実践内容

①図書室の環境整備

図書室の環境整備において、蔵書の質と空間の魅力を高めるため、さまざまな工夫が行った。まず、図書の更新を目的に「学校図書館図書廃棄規準」に基づき、年間約 200 冊の除籍を実施した。

選書に関しては、カタログだけでなく、インターネットや書店の情報を活用し、話題の新刊や人気作品を積極的に導入している。さらに、生徒や教員を対象にアンケートを実施し、朝読書や学級文庫に適した本を含めて希望に応じて購入している。読書への関心を高めるため、文部科学省の調査結果を参考に、漫画も読書の入り口として積極的に取り入れている。

また、生徒の興味を引く工夫として、個人では手に取りにくいポップアップ絵本を導入した。11 月・12 月には大型のハリーポッター絵本を中心に 20 種類を展示し、視覚的な楽しさを提供した。加えて、点字本や LL 本、多言語本など、多様なニーズに応える本も展示し、大規模校ならではの環境づくりを進めている。



【クリスマスの時期の図書室】

図書室の装飾には、特別支援学級の生徒に季節やクリスマスの飾りの制作を依頼した。事務職員が材料や見本を事前に準備することで、担任の負担を減らし、取り掛かりやすくした。クリスマスツリーの装飾も特別支援学級で行い、それらには「特別支援学級作成」と掲示し、活動を伝えている。

貸出促進のためには、POP の作成に使用できる台紙の準備を行い、教員と連携して、図書委員が作成した POP を本と共に掲示している。また図書の表紙陳列や平積みに加え、書店のように本の帯を活用した。帯を掲示す

ることによって本棚が華やかになり、生徒の興味を引く工夫が効果を上げている。



【生徒の作成したポップ】

空間づくりでは、絵本棚の配置を見直し、畳コーナーを設置した。靴を脱いでくつろげるスペースは、読書だけでなく友達との交流の場としても人気である。



【人気の畳コーナー】

最後に、図書室前の掲示板を活用し、来室しない生徒にも本の魅力を伝える工夫をしている。表紙のコピーを使った視覚的な紹介により、図書室への関心を高めている。このような取り組みは、図書室を「本を読む場所」から「本と出会う空間」へと進化させる重要なステップであると考えられる。



【図書室前の掲示板】

② PTA ボランティアの導入

2025 年 1 月、図書室の利用促進と環境整備の一環として、PTA 図書ボランティアの導入が決定された。PTA

加入率は 53% であり、すべての PTA 活動は役割分担のない自由参加型のボランティアである。導入当初は 4 名の保護者が応募し、図書委員の補助的な立場で活動を開始した。

『図書室の開室日を増やしたい』という生徒・学校・ボランティアの共通の希望がある一方で、開室日増加による教員の負担増加が懸念された。そこで、2025 年 4 月からは PTA ボランティアのみで図書室を開室する日を設けることを決定した。

また、図書室では漫画が人気で生徒が集中する傾向があり、漫画の閲覧に時間を費やすことで、他の本に親しむ時間が減ってしまうという課題があった。これを改善するため、ボランティアによる開室日を「本読む day」と名付け、漫画コーナーに簾をかけて閲覧を制限する提案を職員会議で行い、承認を得た。この取り組みにより、読書環境のバランスを保ちつつ、生徒が幅広いジャンルの本に触れる機会を増やすことができた。4 月から 7 名のボランティアにより、開室されており、図書室の利用促進だけでなく、地域と学校が連携して教育環境を整える取り組みのひとつとなった。

4. 課題と解決

PTA 図書ボランティアの導入は事務職員が主導して行ったため、生徒や教員との直接的な関わりが少なく、相互理解や連携に課題が生じていた。図書室の環境整備を円滑に進めるためには、ボランティア・生徒・教員の三者が協力し合える体制づくりが不可欠である。そこで、それぞれの立場の思いや困りごとを把握し、相互のつながりを促進する取り組みを実施した。

① ボランティアと生徒をつなぐ

まず、生徒に対するボランティア参加者の理解を深めるため、事前に説明会を実施した。活動内容のマニュアルに加え、文部科学省の資料『学校図書館の位置付けと機能・役割』を紹介し、図書室が単なる本の貸出場所ではなく、生徒にとって「心の居場所」となる空間であることを説明した。これにより、図書室での過ごし方に多様性があること、読書する以外に生徒一人ひとりの居場所としての価値があることを共有した。

次に、図書室の開室日を周知するため、全教室に「本読む day」の掲示を作成し、月曜日と木曜日に PTA ボランティアが図書室を担当することを明記した。加えて、昼休みには放送委員が「本日は本読む day です。PTA ボランティアの方が図書室を開けてくださいます。」と全校放送を行い、図書室の利用を促進した。



【クラス掲示】

また、図書室から学級文庫への貸出を PTA ボランティア事業として位置づけ、各クラスに対して学期ごとに 15 冊の図書を貸し出した。貸出用のケースは PTA が購入し、貸出・返却の管理もボランティアが担当した。クラス担任を通じて生徒にこの取り組みの趣旨を伝えることで、ボランティアの活動が身近なものとして認識されるよう工夫した。



【学級文庫への貸出ケース】

さらに、生徒からボランティアへの感謝の気持ちを伝える取り組みとして、図書委員によるお礼カードの作成を行った。カードの台紙や出来上がりのイメージ図は事務職員が準備し、図書委員会を担当する教員を通じて図書委員に依頼した。委員がそれぞれの言葉でメッセージを記入し、完成したカードは教員から事務職員が受け取り、ボランティアに渡した。



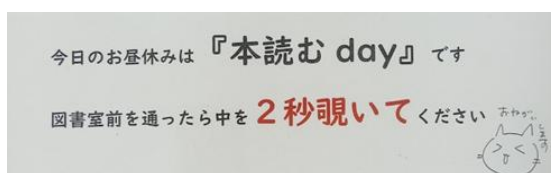
【図書委員によるお礼カードの作成風景】



【作成したお礼カード】

② ボランティアと教員をつなぐ

毎週月曜日と木曜日の「本読む day」に職員室の扉へ掲示を設置した。掲示には「今日のお昼休みは『本読む day』です。図書室前を通ったら中を 2 秒覗いてください」と記載し、教員が図書室の様子に目を向けるきっかけをつくった。教員が図書室に関心を持っていることがボランティアに伝わることで、活動への信頼感の醸成につながった。



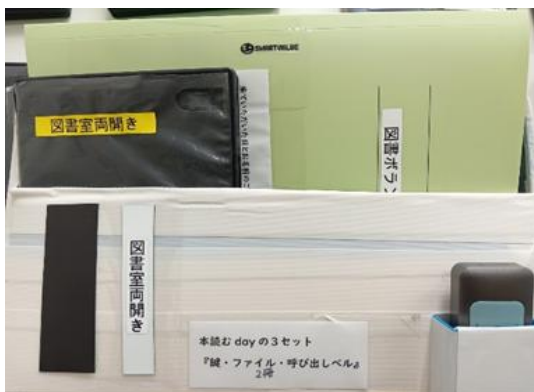
【職員室のドアに貼る掲示物】

次に、図書室での安全管理体制の強化を目的として、呼び出しベルを準備した。これにより、図書室内で何らかのトラブルや緊急事態が発生した際に、ボランティアがボタンを押すことで職員室に音楽が流れ、教員が即座に図書室の状況を確認できるようにした。

さらに、ボランティア活動の記録と情報共有を目的として「ボランティア日誌」を作成した。この日誌は、ボランティア同士の連絡手段としてだけでなく、活動中に気づいたことや懸念事項を記録する場として活用している。例えば、「図書室の利用者が多く、昼休みの声量が気になる」といった記述があった場合には、事務職員から教員に見回りの強化を依頼するなど、対応を行えるようにした。教員が迅速に対応できる体制を整えることで、ボランティアが安心して活動できる環境を確保した。

また、図書室の鍵、ボランティア日誌、バーコードリーダー、呼び出しベルなど、活動に必要な物品を一つのケースにまとめた「図書ボランティアセット」を準備した。これにより、どの教員でも、鍵の受け渡しが行え、ボランティアがスムーズに活動を開始できる体制を整

えた。



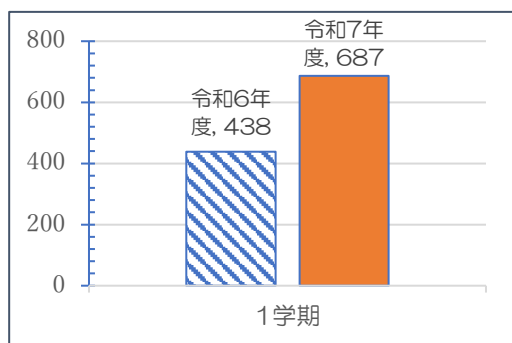
【図書ボランティアセット】

これらの取り組みは、図書室の運営におけるボランティア・生徒・教員の連携を強化し、図書室が安全かつ快適な空間として機能するための基盤づくりに寄与している。今後も、ボランティアの声を丁寧に拾い上げながら、教員との協働体制をさらに充実させていくことが必要である。

5. 成果と今後の課題

① 利用率の向上

2025年度の生徒数は896名であり、前年度（2024年度）の950名から減少している。一方で、図書室の利用状況には顕著な改善が見られた。2025年度1学期の生徒への貸出冊数は687冊となり、前年同時期の438冊と比較して約1.57倍に増加した。生徒数が減少しているにもかかわらず貸出冊数が増加していることから、図書室の利用促進に向けた取り組みが成果を上げていると言える。



【貸し出し数の推移】

② 教員の協力体制の構築

PTA 図書ボランティアの導入により、図書室の運営体制に変化が見られた。これまで、教員の代わりに事務職員が図書室の管理業務を担う形で運営していたが、PTA の参画によって、事務職員が「図書ボランティア担当者」としての役割を明確に持つようになった。この変化は、図書室運営における責任の所在を明確にし、活動の

継続性と安定性を高める要因となった。

また、PTA の協力体制を校内で広く共有するため、校内掲示板や職員会議などを通じて情報発信を行ったことや、生徒の利用率の増加により、教職員の図書室への活動に関心が深まった。結果として、図書室が生徒にとっての「居場所」として認識されるようになり、安心して利用できる空間づくりが進んだ。

さらに、学級文庫への貸出事業においては、PTA がクラス用の貸出ケースを準備したことで、ボランティア活動の具体的な成果が可視化され、学校全体での事業への理解と協力が深まった。このような物的支援は、図書室の利用促進だけでなく、ボランティア活動の意義づけにもつながっている。事務職員自身も、図書室や図書に関する業務に対して教員へ積極的に意見を述べやすくなったと感じている。PTA との連携を通じて、図書室が学校全体で支えるべき教育資源であるという認識を広げ、今後のさらなる活用と発展を期待したい。

③ 今後の課題

PTA 図書ボランティアは、当番制ではなく希望制で活動しているため、安定した人員確保が難しい状況にある。2025年度1学期においては、開室13回のうち10回がボランティアによるものであり、残り3回はPTA事務局および事務職員が対応した。今後、ボランティアのみで運営を継続していくためには、さらなる人員の確保が必要である。しかし、現在のPTA活動の性質上、参加の呼びかけはテトル配信（電子連絡）に限られており、広報手段が限定されている。このため、ボランティアの募集と定着は喫緊の課題であり、持続可能な運営体制の構築が求められる。

また、事務職員は主に環境整備面で図書室に関わっており、生徒との直接的な関わりは図書委員会担当教員を通じて行っている。今後、委員会活動の内容や生徒の図書室での過ごし方を事務職員がより深く理解することで、教員との協力体制をさらに強化できる可能性がある。PTA との連携を通じて図書室運営に関する実績が積み重なることで、事務職員自身も教員に対してより図書室や図書に関する意見を発言しやすくなり、学校内の運営に参画しやすくなると考えられる。

これらの課題に対しては、広報の工夫、連携の仕組みづくり、役割の明確化といった観点からの改善が必要である。図書室が生徒にとっての「居場所」として機能し続けるためには、学校全体で支える体制の構築が不可欠である。